

東京芸術劇場

兵庫県立芸術文化センター共同製作

「Le Père 父」

作: フロリアン・ゼレール 演出: ラディスラス・ショラー

仏気鋭の作家の戯曲を 橋爪功らで日本初演

老いゆく人間の混乱と孤独を観客に体感させる
極上の悲喜劇。“現代版『リア王』”に、
オリジナル初演版演出家ラディスラス・ショラーと
日本人キャストが挑む。

仏演劇界をけん引する劇作家&演出家のタッグ

人はみな時と共に肉体や精神が衰え、積み上げてきた人生はおろか、その「人」そのものが跡形もなく壊れてしまう時がある。そんな、誰も必ず直面する「老い」を、深い人間洞察をもとに戯曲化したのが『Le Père 父』だ。

作者フロリアン・ゼレールは教師から作家に転身後、程なく戯曲の執筆も開始。まだ30代後半ながら、フランスを代表する劇作家としてその作品は世界中で高く評価されている。中でも『Le Père 父』は2012年の初演から2年半ものロングランとなり、フランス演劇賞最高位のモリエール賞最優秀脚本賞などを受賞。以降もイギリスのウエスト・エンド、アメリカのブロードウェイを含む世界30か国以上で上演され、各国の名優たちが演じてきたゼレールの出世作だ。本国でのオリジナル初演に続き、日本初演を手掛ける気鋭の演出家ラディスラス・ショラーに話を聞いた。

「ゼレールは、パリを離れ地方の劇場で仕事をしていた私の作品に注目し、わざわざ会いに来て“いつか僕の戯曲を演出して欲しい”と言ってくれた。初対面から非常に知的でフレンドリーな人物だと感じました。その後、最初に任せてくれたのが今作です。『Le Père 父』は高い評価を得ることができ、私たち二人にとっての代表作になりました」

観客は主人公の頭の中を体験することになる

主人公は80歳のアンドレ。頑なな性格は老いと共に増長し、娘アンヌや周囲の人々も手を焼いている。物忘れに加え、人や場所の認知の混乱など、記憶や意識にも異変が起き始め……。戯曲は、アンドレに見えている“自分



ラディスラス・ショラー

がいつでもいるかも曖昧で、身近なはずの人々が誰かもわからなくなる世界”、その困惑と混乱をそのまま映すように描き出す。

「今作は『La Mère 母』(2010年初演)と『Le Fils 息子』(2018年初演)と併せた“家族三部作”の一本で、これらはみな家族の中で起こる悲劇が題材であると同時に、時間軸が錯綜



したり、主人公の意識の混乱をそのまま描くような共通の文体で書かれている。つまり観客は主人公の頭の中をそのまま体験することになるのです。演劇的で豊かな企みに満ちているうえ、笑いも涙も感動も織り込まれた、しかも人間誰しもが直面する普遍的なテーマを内包する優れた戯曲だと思います」

さらに「劇中でバラバラと展開するドラマに繋がりがや一貫性を求めているのはアンドレだけ。他の人物や情景は断片に過ぎません。ロジックにとらわれず、瞬間瞬間に身を委ね、劇世界に存分に巻き込まれることが、より作品を楽しむための秘訣だと思います」と続けた。

日本での創作で戯曲の新たな魅力を発見したい

この日はアンドレを演じる橋爪功を含む数人の俳優が集まり、ショラーとの軽い本読みやミーティングが行われたという。

「日本で演出するのは初めて。言語の違いはぬぐいようがありませんが、ツメさん(橋爪の愛称)はじめ、出演する皆さんの声で聴いた台詞からは、人間性や真摯な心、ユーモアに国境はないということが感じられました。キャスト、スタッフとさらにコミュニケーションを重ね、言葉を越えた笑いや誠実さ、感動などをこのカンパニーと一緒に探していきたいと思います」との感想で、続けて「ストレートプレイから演劇の世界に入りましたが、後にミュージカルも手掛けるようになり、最近は映画も一本監督しました。常に新たなことに挑戦すること、朗らかに仕事をするのが私のポリシー。日本での経験は豊かな学びの場になるはずで、日本でのクリエイションは、私がこれまで気づかなかった戯曲の魅力を発見させてくれるはず。稽古が始まるのがとても楽しみです」と笑顔で語った。

これまで日本と言えば、自身の子どもたちと楽しんでた宮崎駿作品のイメージが強く、「あの豊かなイマジネーションはフランス人を凌駕する」と言うショラー。『Le Père 父』公演を通し、彼の中の日本のイメージが更新されるのかも興味深いところだ。

取材・文:尾上そら(ライター)

2月2日(土)~24日(日) シアターイースト

詳細はP13へ

作: フロリアン・ゼレール 演出: ラディスラス・ショラー

出演: 橋爪功 若村麻由美 壮一帆 太田緑ロランス 吉見一豊 今井朋彦

上田、高知、名古屋、兵庫、松本公演あり 特設サイト www.father-stage.jp

マニユエル・ルグリ

「スターズ・イン・ブルー」 バレエ&ミュージック

音楽家とダンサーたちが、 純粹にぶつかり合う

バレエ界の生ける伝説マニユエル・ルグリが、
愛してやまぬダンサーや精鋭音楽家たちと、
ライブ音楽とダンスが響き合う
陶酔のプログラムを贈る

綺羅星のようなトップダンサーそして音楽家たち

パリ・オペラ座バレエの歴史の中でも、エトワールの中のエトワールと称される伝説的ダンサー、マニユエル・ルグリ。現在はウィーン国立バレエ団の芸術監督を務めつつ、年に数回は舞台上に立って今もなお輝かしい芸術性を発揮している。そのルグリを中心に、オルガ・スミルノワ、セミヨン・チュージン、木本全優というトップクラスのバレエダンサーたちと、三浦文彰、田村響と若手精鋭の音楽家たちが集結。生演奏と共にパフォーマンスを繰り広げるバレエ&音楽コンサートが、「Stars in Blue- Ballet & Music」だ。

数々の栄光に包まれてきたルグリの新たな挑戦、それは音楽家たちと組みつつ4人のダンサーそれぞれの個性を生かし、音楽性豊かな新作を世に送り出すこと。パリ・オペラ座のエトワール時代から、ルグリは卓越した音楽性で知られ、誰よりも音楽を大切にするダンサー。“音楽は私の生命力でもあります。音楽家とダンサーたちが、ただ純粹にぶつかり合う。ダンサーの魂の見せ合いは、音楽とダンスが出会う美しい舞台になることでしょ”とルグリはメッセージを寄せている。

ルグリと初共演が話題を呼んでいるのは、ボリショイ・バレエのプリマ・バレリーナ、オルガ・スミルノワ。20代半ばながらも年齢に似合わぬ成熟を見せ、ボリショイを代表するダンサーへと成長した。美しく優美な肢体で踊るクラシック・バレエだけでなく、ジョン・ノイマイヤーやジャン＝クリストフ・マイヨーといった現代の巨匠振付家のミューズとしても、インスピレーションを与え続けている。

さらにスミルノワとのパートナーシップで知られ、ボリショイ・バレエのみならず世界各地のバレエ団へのゲスト出演でも知られるダンスール・ノーブル、セミヨン・チュージン。ルグリの秘蔵っ子として、長い手脚と美しいつま先を誇り、ウィーン国立バレエのプリンシパルとして成長著しい木本全優も、日本発の貴公子としてその芸術性を見せてくれることだろう。

世界初演の魅惑的な2作品に注目

新作を提供するのは、バレエ、フラメンコ、民族舞踊…ジャンルと国境を越え、ザハロワなど世界中のトップスターに熱望されて作品をクリエーションして来た振付家/ダンサーのパトリック・ド・パナ。ルグリとスミルノワには、アレクサンドロ・バリッコ原作で映画化もされた小説を発想源とした『シルク(仮)』を振付ける。決して触れ合うことのない二人の沈黙の愛を描いたという。



©Ashley Taylor

チュージンと木本という男性ペアには、アルヴォ・ペルトの『鏡の中の鏡』に振付けた、兄弟愛についての作品を創作。ダンサーたちが踊っている空間にはダンサーだけでなく、音楽家たちの感情やエネルギーも加わることを想定して、豊かな空間を作りたいとパナは語っている。

このほか、スミルノワの『瀕死の白鳥』やスミルノワとチュージン共演の『タイスの瞑想曲』、ルグリが信頼を寄せるピアニスト滝澤志野と取り組んだソロ作品『Moment』など、音楽を大切にした美の極致の作品が上演される。

三浦文彰、田村響との共演で極上の響きのダンスを

ダンスにとって何よりも重要な要素である音楽を奏でるのは、ウィーンを拠点に国際的に活躍する俊英ヴァイオリニスト三浦文彰と、数々の賞に輝き、国内外のオーケストラと共演する若手ピアニスト田村響。ほとんどの演目がふたりによる生演奏で奏でられるだけでなく、それぞれのソロ演奏及びデュオ作品も披露される。大河ドラマ「真田丸」の主題曲の演奏で広く知られるようになった三浦は、3年前にもパリ・オペラ座のバレエダンサーと舞台で共演しており、バレエの美に魅せられたという。

超一流のダンスと音楽が共鳴して極上の響きを見せ、そして聴かせてくれる「Stars in Blue」。バレエ界のレジェンド、ルグリが日本の観客に贈る、世にも美しいパフォーマンスとなることだろう。

文：森菜穂美(舞踊ライター)

3月8日(金)・9日(土) コンサートホール 詳細はP15へ
ダンサー：マニユエル・ルグリ オルガ・スミルノワ セミヨン・チュージン
木本全優
ミュージシャン：三浦文彰(ヴァイオリン) 田村響(ピアノ) 滝澤志野(ピアノ)



三浦文彰

田村響

©Yuji Hori

©長藤翠

大阪、宮崎、愛知公演あり 特設サイト www.danceconcert.jp